岩漿の英訳は「マグマ」、ならばそのマグマの源は地球の「コア」つまり「核」。
同人誌の核は会員つまり人、なかんずく人の心ですから。　　――馬場駿――

岩漿会報
2023、November

CORE

No.16
岩漿事務局

ＣＯＲＥ No.16 巻頭言

岩漿文学会３代目代表　　橘 史輝

木内、小山氏が代表として築き上げられた岩漿文学会ですが、小山氏が70歳を超えて新たな挑戦に向いたいとの希望から、小生にバトンが回ってきました。齢60歳を超えて退職したものの年金支給65歳以上の最初の対象年齢により、現役勤務を続けながらの代表となります。編集部の方々にも、土日の休日もろくに休めない現役の身を訴えましたが、皆さんも多忙とのことで、誰かがやるしかないという状況下での船出となります。

３代目は、徳川家光や北条氏康ではありませんが、かなり重要な代替わりとなります。ここで頑張ると盤石な体制になりますがいかがなものでしょうか。文学もデジタル化し本屋業も衰退し書籍を手にとる時代ではないかもしれませんが、同人誌は地方文化を支えていると自負しています。まずこの会報ＣＯＲＥを入口として、岩漿を読んでいただければ幸いです。

※HP「**文芸同人誌案内**」で岩漿が紹介されています
https://hiwaki01.sakura.ne.jp/

※HP「**馬場駿の本棚**」で岩漿が紹介されています
http://dojinbaba1.jp/gansyou.html

「東アジア文化都市２０２３静岡県」協賛　静岡県文学連盟創立６０周年記念展開催

～１１月２４日から１１月２７日まで静岡市葵区　江崎ホール・会議室・展示室～

「岩漿」２６～３１号を展示予定　文学連盟誌「文芸静岡」をはじめ「風越」など会員が県内で発行編集している同人誌が展示され、椅子とテーブルを準備し、来場者がゆっくり読むことのできる展示方法を計画しているとのことです。興味のある方は、是非出掛けてみて下さい。

※詳細は「静岡県文学連盟」でネット検索できます。（小山）

お勧めの一冊　　小山修一

中山千夏：著『 ふむ、私は順調に老化している 』

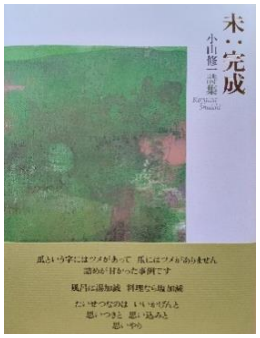
伊豆新聞に定期連載中の「ただいま雑記」二〇二〇年一月八日から二〇二一年九月十五日の間に掲載されたコラムを纏めた本で、帯には「老化は一生一度の経験。老年期には、豊富な人生経験と長年の間に培われた洞察力が備わっている。だから、楽しい。」と、著者の思いが記され、表紙裏には、「コロナ禍、自粛要請、東京五輪、正体の見えない不安。自らの老化を楽しみながら中山千夏が綴る、日々の発見。」と、これは編集者によるものだろうキャッチがチョコンと記されている。

本文に入る前に「老化はすでに始まっている」というタイトルで、還暦真っただ中の思いを、「暦がめぐって還ったのだから、私は子どもに戻ればいい。子どもの構えをとればいいのだ。／略／それは何より無計画、明日を思い患わないことだった。」と記述しているとおり、本文五十四編のコラムは自由奔放、忖度無しの発言に徹していて、庶民目線の切り口に清々しい刺激を受けたり、溜飲を下げることが少なからずありますし、ちょっとした空き時間に気楽に読むことのできる内容ですので、伊豆新聞ですでに読んだ方は再読し、読んでいない方は是非、手に取って読んでいただきたいお勧めの一冊です。

中山千夏さんは現在、伊東市在住。「名子役」として八歳で芸能界デビュー。俳優、司会者、声優、歌手、作家として大活躍し、参議院議員を一期つとめ、現在は著作に専念しているという、七〇歳前後の人ならたいてい知っている超有名人です。一九四八年七月一三日、熊本の山鹿生まれ、蛇足ですが、私の誕生日は三年後の七月十日、私の妻は熊本阿蘇産山生まれですので、一方的乍ら勝手に親近感を沸かせている次第です。また、有り難い事に、近年は毎号謹呈している岩漿を、超多忙の中お読み頂いています。

※著書２０２１年刊・ハモニカブックス出版　定価１，６５０円（税込み）

岩漿の作家たち　出版物紹介



詩集「 未：完成 」　　小山 修一

「人間のいる風景」2018年、「風待ち港」2021年に次ぐ第三詩集。

瓜という字にはツメがあって　爪にはツメがありません
詰めが甘かった事例です

風呂は湯加減　料理なら塩加減

たいせつなのは　いいかげんと
思いつきと　思い込みと
思いやり

※帯に掲載の作品『いいかげん』より

土曜美術社出版販売刊　定価2,200円（税込み）

第二詩集「 歩行感覚 」　　鳥飼 丈夫

会員の鳥飼丈夫さんが「詩と思想」五十周年記念出版シリーズの一冊として第二詩集「歩行感覚」を出版しました。鳥飼さんは京都出身。長く中学校美術教師を勤める傍ら，詩や短歌の世界にも身を置いて、伊東短歌会会長・ 伊東市文化協会副会長を歴任、活動するとともに「風越の会」を主宰し、詩誌「風越」を年二回発行しています。（小山）

土曜美術社出版販売刊　定価2,200円（税込み）

ホッチキス止め小冊子

手作り詩集「 輪郭 」　　近藤 満丸

縦書き横書き、自在の構成。奔放な言葉たち。千代紙コラージュ風カットも素敵です。入手希望の方は編集部迄ご連絡を。（ほ）

◆❋⁂✡◆❋⁂✡◆❋⁂✡◆

エッセー　　アゼトウナと岩漿　　北川ただひと

１０月のある日、アゼトウナに会いに出かけました。ちゃんと生きているかな、そんな思いで出かけました。炎暑の長い夏が過ぎ、５月に痛めた座骨神経痛のリハビリもようやく終了となったのです。杖をついて出かけました。場所は伊豆高原の対島の滝のすぐ近くです。溶岩が固まってできた柱状節理の断崖絶壁に荒波が打ちつける所です。潮風も吹きつけます。アゼトウナはそんな過酷な場所を棲み処にしています。出会えました。生きていました。うれしくて写真を撮りました。健気な生命力に心がふるえました。冬場でも暖かい海岸の岩場にに生え、図鑑によればアゼトウナは伊豆半島から西の太平洋岸に分布するキク科の多年草、冬岩のすき間に根をおろし、秋から冬にかけて黄色い花を咲かせるのだそうです。花言葉は

「変わらぬ愛、誓い」だそうです。なんだか恥ずかしいような花言葉ですが、その思いは理解できます。
過酷な人生であっても愛を貫こうとするアゼトウナです。それはわたしたちの「岩漿」のようだとも思いました。大袈裟ではありません。初代代表 木内さんのホームページ「岩漿文学会」紹介コーナーを見ればわかります。
城ケ崎自然研究路のアゼトウナは昨年より葉数が増えておりました。輝かしい黄色い花はもうすぐです。

◆❋⁂✡◆❋⁂✡◆❋⁂✡◆

エッセー 念仏の鉄　佐木次郎

この間、暇に任せてなんとなくyoutubeを見ていたら、どういう経路を辿ったものか必殺シリーズの紹介動画に行き当たりひどく懐かしい気持ちになりました。必殺シリーズというのはご存じのとおり藤田まことの中村主水が有名な時代劇シリーズで、私も（なぜか）子供の頃からよく見ていたものです。最初に見たのが「新必殺仕置人」だったことは覚えています。あの中に出てくる念仏の鉄（演・山崎努）が当時はとにかく好きで、確かまだ小学生くらいだったと思いますが、クラスでよく、ズバッ、ボキボキって、念仏の鉄ごっこみたいのをやったものです。その頃、同じクラスにＫ君という男の子がいました。Ｋ君も念仏の鉄が大好きでした。当時Ｋ君はクラスのみんなに「マル」というあだ名で呼ばれていました。Ｋ君はあまり勉強が得意ではなく、何度かテストで０点をとっていたからそう呼ばれていたのです。しかしＫ君は絵がすごく上手でした。お互い念仏の鉄が好きだったので、Ｋ君はよくノートの隅にさらっと念仏の鉄のイラストを描いて私に見せてくれたものですが、それが本当に上手だった。特徴をよく捉えていただけでなく、そこには今にも喋り出しそうな生気さえが感じられたものでした。そういえば、彼と最後に会ったのはいつだったろう。子供の時代を脱したあとの、彼の記憶が私にはない。今頃彼はどうしているだろう。あの素晴らしい才能を生かして、何か絵の仕事にでも就いているのだろうか。

カット:近藤満丸

新規会員　自己紹介　　新井 桜香

初めまして。新井 桜香と申します。
昨年は、「岩漿」25周年記念、おめでとうございました。今回、初めて「岩漿」に載せて頂き、とても嬉しいです。有難うございました。
先日、小学校の卒業アルバムを開いてみました。卒業文集もあり、当時の私は、「鎌倉をたずねて」という題で、6年生になってから歴史の勉強が始まり、興味がわいた事、開校記念日の11月2日に友達と1ヶ月前から計画を立てて、鎌倉に行った事、などを書いていました。子供の頃の懐かしくて温かい思い出です。
とんかつとケーキ、カラオケが好きです。「岩漿」の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

新規会員　自己紹介　一本 美智

一本美智と申します。中学生の頃に中原中也や八木重吉から影響を受け詩を書き始めjdq好きな詩は八木重吉の「素朴な琴」シンプルで凛とした佇まいの作品にあこがれつつも時間と共に興味は詩から歌詞。歌詞から絵本へと広がり気がつけば人生の節目。詩作り再開決意と同時に小山修一さんの詩「なみだのかたち」と出会い岩漿への投稿が叶いました。皆さんからの感想に気づきや励まし感謝です。

新規会員　自己紹介　虹亀（のじかめ）

雲の上で、今日も夫は『赤とんぼ』を調子はずれにうたっています。そして、私の好きな秋のうたは『白月』。二つとも三木露風作詞。何かご縁を感じます。一本美智さん、お誘いありがとうございました。
言葉のマグマの皆さま、宜しくお願い致します。文法、きめ事ナシ、響きのまゝに、足もとに咲くオオイヌノフグリの青い花になりたい、と。すべてに愛と感謝を。

岩漿32号 原稿募集〆切　**2023年12月31日**

- ご注意: メール及び封書に、岩漿宛の原稿や連絡である表示をお願いします。
- 埋め草原稿同時募集: 二段組の下段空きに400字程度、頁割負担金無料。
- 但し埋め草原稿は必ず掲載される確約はありません。

◆ 岩漿本誌　原稿宛先 ◆　　32号より本誌の原稿宛先住所、メールアドレスが変更になりました。

〒410-2303　静岡県伊豆の国市大仁町立花2-275　　桜井方　橘史輝
パソコンメール　sakura39@ka.tnc.ne.jp

岩漿31号読後感

― Salyu ―

【コスプレの思い出・桂川ほたる】文章は勿論、一つのエピソードの見せ方が上手なので、笑いと懐かしさと、ほんのちょっぴりの悲哀(笑)のツボに気持ちよく導かれる。読み終わってからもふとした時に思い出して笑ってしまうのは、頭の中を想像の再現フィルムが流れるから。

― 近藤 満丸 ―

天気晴朗。霧晴れた。こんな場合でも無い。のですが、みなさんの努力の賜物です。文芸誌の塊とはいえ、力作を感じます。日頃のナリユキとはいえ、今をトラエル。力を込めて、自分(作者)の発露の素敵さに読んでいて楽しくまた、自分に無い分野としても楽しめます。発行者さん、スタッフの方々にご苦労様と申し上げたい。続々、連結、頼もしき。輝きは骨足す必要もなし、光源エンジン全開で。光沢増すや、期待大。

佐木次郎 作『秋の終わりに』読後感　　馬場駿

同人誌作家としての佐木次郎氏の小説をずっと鑑賞していて私はこの人は人の心の在り処の探求者だと理解するようになりました。探求は常に注意深く理知的で時に激しく行われます。今回も人の心の繊細な動きを余すところなく描き切る作者の力量とセンスに羨望の気持ちを抱きました。人間の、自分と他者への複雑な「想い」が創り出す罪とでも言いましょうか。それを哀しい音とともに感じました。克彦と千代子と千鶴の三つ巴の恋、一見すると、いや、読み続けているその段階でもそんな感じを持ちそうですが、本作はそんな浮ついた話ではなかったのです。た〝好意、対抗心、思いやり、嫉妬、信頼、反発〟等が□ちゃ混ぜになった「心の奥底のつながり」が三人にはあった。それなのに克彦と千代子には現実の言動、出来事、事件とのギャップが生じてしまう。ようやく潜在的な本音に還ろうとする二人、その結果が破滅に繋がると知りながら。一方千鶴は心のつながりを背負ったままながら、刑事としての職務を凛として執行する途を選択する。彼女は逃亡を動機とする千代子と克彦の逢瀬が二人の幸に繋がるとは思っていないのだ。彼女はこの二人とは違って「こども」ではない。この描き方が作品の質を高めている。本作には松本清張の『張り込み』のときとは別のハラハラドキドキ感があった。中でも瞠目したのは千代子と交際相手の木幡との間の刑事事件そのものを詳述しないという選択でした。素晴らしかった、詳報などこの作品の本流に相応しくないからです。それと約束の場で確保されるだろう二人が、なぜ警察は落ち合う場所を知っていたのかという疑念を抱いたとき、夫々が誰からの情報だと思うのか。それを読者への置き土産にしたことです。まことにニクイ終わり方と言えるでしょう。□
□

３１号に感想など寄せていただきました

加藤好一様・広岡守穂様・竹腰幸夫様・田中一雄様・かわいふくみ様・大関博美様・江川洋様・桑田窓様・杉野紳江様・田中裕子様・岡田美幸様はじめ、多くの皆様から読後感などお寄せいただきました。　心から感謝いたします。ありがとうございました。

CORE

岩漿とは「マグマ」。□
その源は地球のコア。□
COREとは核。□
会員一人ひとりの心(命名者、木内氏の言)。
岩漿初代代表木内氏が大任を終えて、二代目小山氏にバトンタッチされた時、二人のH(ほたる、深水)が立ち上げた会報CORE、会員をはじめ読者の皆様からも好評を頂いたとの事で、続行を許されました。有難うございます。
経済的な理由もあり、A4版3枚6頁に収め郵送。今日ではメールの方々も多く、この限りではありませんが。

限られたスペースで如何にしたら皆様のお心に、COREの火が燃え盛るかしらと、レイアウトに心砕くほたる女史は真夜中、紙面の上をピカピカ光り飛び回る。二Hは夜10時頃に最後の編集会議を電話で行なう。版下が私に送られてきて校正、コピー、送付。ほたる女史が仕事の休日に私宅に来、二人で行なう送付作業は年の離れた姉妹のように楽しい。
なればこそ今日まで続けられた私達のCORE、皆様のCOREなのです。感謝！
(深水)
※ 次回のCORE №17からパソコン入力作業に強い味方の岩越氏も加わり、尽力されます。

CORE

CORE原稿宛先 > 岩漿事務局　◆◆ 会員外の方の投稿も掲載させていただきます ◆◆

・岩漿サポーターの方々から暖かい支援金をご寄付頂きました。いつもありがとうございます。
・ご多忙の中、会報CORE №16にご投稿くださった執筆者諸氏に深謝いたします。
・新入会いただいた皆様、今後とも岩漿・CORE 共々よろしくお願いいたします。